休日・夜間に大学院で学び政策形成力をアップ

上田　望
荒川区総務企画部企画担当課長

【うえだ・のぞみ】
1972年東京都三鷹市生まれ。1997年荒川区役所に入庁、国民健康保険課、学務課、秘書課を経て、東京都総務局に2年間研修派遣。その後職員課を経て、2013年から子育て支援部保育課長、2016年から現職。

大学院生活がスタート

早いもので、今から4年前のことになります。1997年に荒川区役所に入庁後、ちょうど15年が経った2012年の春、私は、念願だった明治大学専門職大学院ガバナンス研究科（以下「明大ガバナンス研究科」）に入学し、働きながらの大学院生活をスタートさせました。2年間の大学院生活が、その後の私の人生を大きく変える転機となったと言っても過言ではないくらい、充実した2年間を送ることができました。またそれ以上に、大学院で出会った方々とのその後のネットワークがとても大きな財産となっています。

授業は平日夜間と土曜日がメインで、仕事との両立は中々ハードでしたが、「この年齢になっても学校に通える！」という喜びを実感しながらの日々でした。同大学院には、私と同じような自治体職員だけでなく、地方議会の議員、会社員、公務員志望の学卒者等、志ある様々な人たちが通っていて、その方々との交流はとても刺激的でした。組織や立場、年齢の枠を超えたネットワークが広がり、仕事にもプライベートにもとても役立っています。

なぜ、大学院で学ぼうと思ったのか

そもそもなぜ、大学院で学ぼうと思ったのか。2003年頃に専門職大学院制度（高度専門職業人の養成に特化した課程）ができたと記憶していますが、そのあたりで漠然と「大学院に行って勉強したいな」と思うようになりました。現在わが区の副区長である職場の大先輩が、開校したての明大ガバナンス研究科に入学し、第1期生として学ばれていたことを職場の職員報で知ったことも大きなきっかけだったと思います。

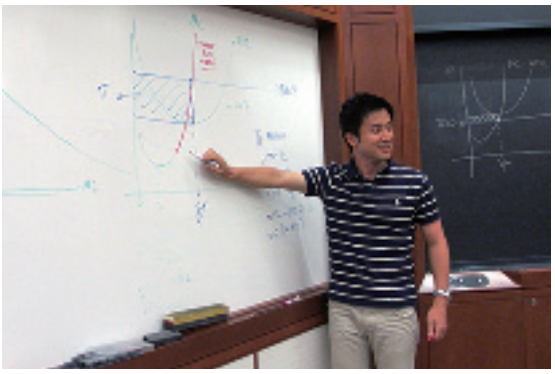
「公共政策」についてもっと知りたいと思い、ハーバード・ケネディスクールの本を読んだり、明大ガバナンス研究科の無料公開講座を受講したりして、いつか自分も入学して公共政策を学び、今後の仕事に役立てたいと思うようになりました。

2012年から第9期生として「頑張ってこい」と区から推薦を受けたときは、本当に嬉しく思いました。

どのようなスケジュールで学んだのか

大学院1年目は、公共政策研究、ガバナンス研究、政策創造研究、都市計画とまちづくり、災害と危機管理などの科目を履修しました。理論ばかりではなく、経験・人脈も豊富な先生方の実践型授業が特徴です。90分のうち講義が半分、残りはディスカッションとなることがほとんどの参加型

修了式で同期の仲間たちと


ハーバード・ケネディスクールを見学

授業で、先生や受講生と様々な意見をぶつけ合います。授業内だけでは終わらず、7限終了（22時）後続きを飲みながら…などということもしばしばありました。

大学院1年目当時、職場では係長の職にありました。その前年度に管理職選考に合格し、大学院2年目となる2013年から管理職となる予定でしたので、何とか1年目に取れるだけの単位を取ってしまおうと計画しました。仕事の定時が17時15分まで、授業は18時55分から2コマで22時まで。月曜2コマ、水曜1コマ、金曜2コマ、土曜の午後から3コマ、その他ゴールデンウィークや日曜日の集中授業も取りました。

2年目は修士論文（明大ガバナンス研究科では「リサーチペーパー」と呼んでいます）に集中できるよう、1年目でほぼ全ての単位を取得することができました。これも職場の皆さんの理解と協力があってのことでした。本当に感謝しています。

余談ですが、社会人大学院は授業の勉強だけでなく、授業後の交流も貴重な勉強となります。同期の人たちは、仕事や年齢もバラバラ、多彩な経歴の人が集まってきています。そうした方々との7限終了後の異業種異年齢交流会（8限という名の単なる飲み会⁉）は、とても刺激的で、大学院生活をさらに充実したものとしてくれました。

2年目は、リサーチペーパー執筆のため、ゼミ活動が中心でした。私は、青山佾先生（元東京都副知事）のゼミに参加、ゼミ長という大役も仰せつかり、何とか務めさせていただきました。青山ゼミの特徴は、ゼミ生同士の交流はもちろんですが、何と言っても、沢山の素晴らしいOB・OGの方々から貴重なアドバイスや協力がいただけるというところです。

はじめは、何万字もの論文が果たして自分自身に書けるのか、と正直とても不安に感じていました。しかし、こうした先輩方からのアドバイスによって、試行錯誤しながらも、どうにかこうにか書き終えることができました。優秀論文賞という過分な賞までいただき、今後の公務員人生で軸となるような論文が書けたのではないかと密かに思っています。

大変だったこと

仕事をしながら大学院で学ぶにあたって大変だったことは、時間のやり繰りです。1年目は取れるだけ授業を取った関係で、期末レポートの作成はとても苦労しました。1授業あたり数千字のレポートが求められ、同時期に何本も書かなければなりません。また授業によっては、毎回レポート提出を求められるものもあり、パソコンと向かい合っている時間がとにかく増えました。

毎回提出しなければならないレポートについては、記憶が薄れていってしまうのを防ぐため、授業が終わったその日か、遅くとも次の日までには書くことを心がけました。また、レポートを書くために、大学の図書館もよく利用しました。大学の図書館には、勉強の手助けとなる専門書がたくさんあり、様々な情報を入手できることはもちろんのこと、周りの学生たちが真剣に勉強や読書に勤しむ雰囲気が、私自身の学習意欲をさらに奮い立たせてくれました。

大学院仲間との飲み会はなるべく出席するようにしていましたので、それ以外の飲み会はなるべく断り（申し訳ありません！）、好きなゴルフもほぼ封印し、パソコンに向かう時間を増やしました。

写真上／高架高速道路を地中化し、地上部を公園・歩道化したボストンの「ビッグディッグ・プロジェクト」
写真下／ニューヨーク市役所では、児童保護の仕組について担当者から話を聴いた

大学院で学んだことで、仕事にどのような影響があったか

リサーチペーパーの執筆に取り組む大学院2年目に、管理職に昇任し、子育て支援部保育課長となりました。大学院でも仕事に直結する研究をしようと思い、リサーチペーパーのテーマには「特別区の保育所待機児童問題」を選びました。待機児童解消のための「量」の拡大と「質」の高い保育サービスの提供を両立させるにはどうすべきか等について、荒川区以外の取組をリサーチするとともに、青山先生のご助言で、福祉先進国であるヨーロッパの保育に関する文献をあたり、日本にはない制度等も調査しました。

保育園に入園できなかった保護者が書いたブログをきっかけに待機児童問題がさらに社会問題化していますが、この問題は都市部の多くの自治体にとって大きな課題であり、未だ解決に至っていません。そうした問題を研究テーマに取り上げ、管理職1年目で深掘りできたことは、その後の仕事にも役立ったと思っています。

また、大学院の授業ではほぼ毎回と言っていいほど、発表をし、議論を戦わせ、質疑応答を行う場面があります。こうしたことを繰り返すことで、知らず知らずのうちに自分自身訓練されたのではないかと思っています。さらに、教室内に留まらず、校外授業や合宿などにも積極的に参加しました。そのような場で知らなかったことに沢山出会い、様々な人の貴重な体験談等を聴くことは、その度に新たな発見があり、自分自身の視野を広げることにつながったと思っています。

夏休みを利用した海外視察

夏休みを利用して青山先生はじめ有志で行ったボストン・ニューヨークへの海外視察も印象深く、良い思い出となっています。行程はボストン3泊、ニューヨーク3泊の計6泊8日。事前勉強会では各自が視察したいテーマを発表し合い、同行メンバーの問題意識の高さに大いに刺激を受けるとともに、テーマを持って旅行することの重要性を学びました。プライベートな旅行では中々訪れることができない所に行けたり、貴重なお話を聞けたりと、とても有意義な視察となりました。

例えば、高架高速道路を地中化し、地上部を公園・歩道化した「ビッグディッグ・プロジェクト」（ボストン）と、高架貨物線路跡地の空中緑道化プロジェクト「ハイライン」（NY）。人が集まる場所を創出する新しいまちづくりの取組事例です。真夏の暑い時間帯でしたが、暑さも忘れじっくり時間をかけて歩きました。近年では、東京においても、首都高速大橋ジャンクションの屋上を利用して空中公園が整備されたりしていますが、こうした取組はとても興味深いです。今後、日本橋の上を走る首都高速はどうなるのか…などといろいろ考えさせられました。

ボストンでは、ハーバード大学（憧れだった公共政策大学院「ケネディ・スクール」も見学できました！）や、マサチューセッツ工科大学（MIT）も見学してきました。日本人でMIT研究員の方を招いた夕食会では、研究活動や現在に至るまでの貴重なお話を沢山聴くことができました。

さらにニューヨークでは、日米交流団体ジャパン・ソサエティで「アメリカにおける寄付習慣」についてお話を伺い、また、低所得層の割合が高いブルックリンのブラウンズビル地区で住宅再生プロジェクトを手掛けるロザンヌ・ハガティ氏に街を案内してもらったり、ニューヨーク市役所で「児

童保護」に関する仕組について直接担当者からお話を伺ったりしました。

大学院で得られたものは何か

大学院で得られたもの。まずは当然のことですが、授業で沢山のことを学びました。明大ガバナンス研究科の教授陣には、省庁や自治体で長年要職を務められた方や、途上国での都市開発に携わってこられた方など、実務や海外経験ともに豊富な方が揃っています。行政に携わる人間として、もっと広い世界を見て、政策形成力を身につけたいと考えていた私にとって、この指導陣はとても魅力的でした。

今こうして振り返ってみると、2年目にもっと授業を取れたのではないかと少し心残りに思っています。取りたかった科目の中で取れずじまいだったものもあり、せっかくの大学院生活をもっと充実できたのではないか、と考えたりもします。

ニューヨークのブラウンズビル地区にて

ただ、当時は管理職となって1年目ということもあり、時間的にも精神的にも余裕がなく、リサーチペーパーの執筆だけで精一杯だったかな、とも思います。先輩方からも「ガバナンス研究科は卒業してからが真骨頂！」などとよく言われますが、OBのネットワークなどはまさにそのとおりだと実感しています。

こうして考えると、大学院に通って得られたもの、それはやはり「出会い」がいちばん大きなものだと思います。社会人になって以降、毎日の生活がほぼ職場と家の往復のみでしたので、話す相手や人との出会いも狭まっていきがちでした。

そんな中、年齢も違う、仕事も違う、意見も違う、志ある人たちとの新たな出会いは、一言では言い表せられないくらい貴重なものとなりました。修了から2年以上経った今でも、定期的に集まり、近況報告や意見交換をしたりしています。また、日々の仕事の中においてもこのネットワークが役立っています。

仕事上の課題について情報交換したり、アドバイスをもらったりということはもちろん、その他においても、例えば昨夏、職場の若手職員たちの勉強会（荒川区では組織内研修機関である「荒川区職員ビジネスカレッジ（ABC）」という組織があります。）で、ゼミ長として若手職員とともに虎ノ門ヒルズを訪問した際、虎ノ門ヒルズの再開発に携わった大学院の同期にたまたま遭遇し、案内や再開発の説明までしてもらう幸運に恵まれた、ということもありました。この「出会い」を今後も大切にしていきたいと思っています。

地方公務員という仕事の魅力とは

地方公務員という仕事に携わって今年度でちょうど20年目になります。福祉、教育、人事など、これまでいろいろな部署を経験してきましたが、どこの部署の仕事も「やりがい」がありました。住民に最も身近な自治体で、住民の息づかいを間近に感じながら取り組めるという点においても、今の仕事は自分に合っていると思っています。魅力を一言で語ることは難しいですが、管理職になって思うことは、一つ一つの仕事に対する「達成感」をこれまで以上に実感できるようになったのではないかと感じています。

保育課長を3年務めた後、今年度からは企画担当課長として、区の基本となる計画策定や、全庁的な課題の調整などに携わることとなりました。これまでよりもさらに広い範囲での勉強が必要だと思っています。大学院で学んだことや人脈を生かしつつ、自分自身がさらに成長できるよう取り組んでいかなければと思うとともに、管理職として少しでも区に貢献できるよう頑張っていきたいと思っています。